大丈夫だょ

MK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大丈夫だょ

【Ｎコード】
Ｎ４４２９Ｉ

【作者名】
ＭＫ

【あらすじ】
私が中学に入ってからいままで３にんの人と付き合いました
最初に付き合った人は私の初彼だった
その人と私の間に入ってくる人がいて、私と彼を別れさせようとした
私は堪えられなくなった
その人と別れてから付き合った人とは結構うまくいった

でもその人がＭだったから、思うように付き合うことができなかった
結局その彼とも別れてしまった

そして今
１４年間で１番幸せだ
今の彼氏はとても積極的で、少しエッチだから
「彼氏」ってこうゆうことを言うんだ。って初めて知ったよ

中1〜

私は香穂
ごくごく普通の中2の女子だ
特別モテるとか、友達がいっぱいいる訳でもない
どちらかというと友達は少ない
いままで付き合った人は今付き合ってる人も合わせて3人
まぁ初めて付き合った人は元彼に入れたくない
だってあれは私が好きで付き合ったんじゃないから
いつの間にか友達が付き合わせたんだもん
その友達は今じゃ友達と言いたくない存在だけどね

その友達の名前は愛
私が1年の時にちょっとだけ仲がよかった
私にとって初めての彼氏を紹介してくれたのも愛だった
でも必要以上に私と彼の中に入ってきた
私はそれがすごく嫌だった
彼と喧嘩っぽくなったのも愛が原因だった
愛は私の彼と親戚らしく、私に親戚だということを自慢してきた
でも彼の親は離婚していたため、はっきり言って、愛とは血がつながっていないのだ
だから、親戚と自慢されても「ふ〜ん」としか言えないのだ
「おれは親戚だからお前の彼氏と同じ墓に入るんだょ」
と言ってくる
でも、親戚だからといって、同じ墓にはいる訳ではない
同じ家に住んでいるならともかく、血すらつながっていないのだから同じ墓に入ることはまずないと思った
でも愛は「親戚なら同じ墓に入るにきまってる」とずっと言っている

なにもしらないんだろう

私が彼と付き合ったのは中1の7月だった
日にちまでは覚えてない
彼とは付き合っていたのに一度も話したことがなかった
でも2時間程の長電話は2、3回した
彼の携帯はパケホではなくて、一定の料金を過ぎると自動的に携帯が使えなくなる
だから2時間程の長電話を2、3回しただけで携帯使用料金が大変なことになるのだ
というわけで月の始めに携帯が止められた
携帯が使えない間、学校で話す訳でもなく、私は彼の携帯が使えるようになるのを待っているだけ
その時間がたとえ1週間であろうと、私にはとても長く感じた

次の月になって携帯が使えるはずなのに、メールがこなかった

私は彼にメールしてみた
でも返ってこなかった
届いているはずなのに・・・

彼は木曜と日曜が塾だ
その塾には愛もいる

私は愛にメールで聞いてみた
「匠ってまだ携帯つかえないの？」
・・・
「白根」
・・・
知ってるくせにいつも私に嘘をつく

きっと携帯が使えるのだと思い、私は彼にメールしてみた
やっぱり返ってこない

そんなことを繰り返してるうちに1ヶ月がたってしまった

今月こそメールがくるだろう

そうおもっていたがやっぱりメールがこない

突然メールがきた
「よっ！」
なんて短いメールだ・・・
私がどんだけ寂しくて不安だったか彼はわかっていない
「久しぶり」
私の一言だけで返信した
彼から返ってくるメールは全部短い
私は彼が私のことを好きじゃないのかなと思いはじめた
私は好きになってきたところだった

そんな時、愛が私と彼の間に入ってきたのだ
「匠が言ってたけど、お前のことすきじゃないってさ」
私はとても不安になった
でも彼にメールしても返ってこない
どうして？
なんでこうゆう時に限って返信くれないの？

愛が言っていた事は本当なのかどうか、それをはやく聞きたかった
返信がこないまま、私の所に愛から彼についてのからかいメールや、
冗談メールがくる

中1〜

からかいのメールがあまりにもしつこかったので、私は愛からのメールメールを無視した

次の日、学校に行くと愛が走ってきた
「お前、何でメール無視すんの？返信しろよ」

私はにらんでやった
愛は完璧キレている
もちろん私もキレている

それから私は愛が［うざい］と思うようになった

こんなことより匠から返信がこないことが私を不安にさせる

私は決めた

匠と別れる

匠になんて言おう・・・
直接話したことがないから別れの言葉もメールしかなかった

私は思っていることを箇条書きにして、最後に
「終わりにしよう」
とかいた

するといままで全く返信してくれなかった彼から返信がきた

「香穂がそう思うならしょうがない。香穂はそれを望むんでしょ？
やっぱ学年違うとうまくいかないね。」

・・・
学年が違ったってうまくいってる人達はいっぱいいる
うまくいかないと思ってるのは匠だけだ

匠がMだから私はできるだけSでいたんだよ？
「学校で話そう」
って何回言ったとおもってんの？
私の気持ち気づいてよ・・

私は別れてもこれはずっと思っていた

彼と付き合っていたのはたった3か月
でっも私にとってこの3か月は長かった

こんなことを思いながらも、フリーになった私は気楽でいた

ある日、斜め前の席の男子が
「今お前フリーだろ？良紀って知ってる？」
と言ってきた
「え？誰その人」
私はその人が誰なのか知らなかった
「知らないか・・じゃあ次の休み時間連れてくる」
そう言って、ほんとにその人をつれてきた

・・・あの人、どっかで見たことあるな～あ！選択授業だ

その人を知ったのはその時だった
顔はまぁまぁ
声は低くていい感じ
髪の毛は短い
陸上部

いまいちだったが、なぜかその人が頭をよぎる・・
なんでだろう・・・
授業中なのに先生の話なんて聞いてられなかった

その人が頭をよぎるから・・・

その４日後

斜め前の男子が、教室の床に座っていた私の腕をいきなりつかんでひっぱって行った
なんで??
「さぁいってらっしゃい」
こう言われたが、私はなんのことかわからずに首をかしげた
「なに？」
私は聞いた
「まぁまぁ！いいからいきなって」
私はその男子に背中を勢いよく押されながら、廊下を進んで行った

1階の廊下と2階へとつながる階段を結ぶ渡り廊下にあの人がたっていた

私がそこに行くなりこう言った
「好きです！付き合って下さい！」

私は直接こんな告白をされたことがなかったから、初めての不思議な気持ちになった

中1〜

・・・私はうなずいた

この人なら私を悲しませたり不安にさせるようなことはしない
そう思った

今思えばその時、もっとよく考えて返事をすればよかった
だって、結局わかれたんだもん

いきなりの告白にびっくりしながらも少しうれしくて、恥ずかしくて私は下を向いたまま教室に戻った
すると斜め前の席の男子が
「良紀は何気モテるんだぞ。良紀をねらってる奴なんかいっぱいいる。でも良紀はお前がずっと好きだったから、他の奴にコクられても断ってたんだぜ。」

なぜかとてもうれしかった
でもこんな簡単にＯＫしてよかったのだろうか
匠と別れた４日後にはもう新しい彼氏がいる
これじゃあ私はコクられれば好きじゃなくても付き合う軽い女ってみられちゃう
でも私は匠を忘れたかった
だから今回はこれでいいんだ
そう思っていたけどやっぱり私は軽い女って見られてるのかな

毎日休み時間には彼氏になった良紀が私のクラスにきてくれる
でも最初はお互いの事を全然知らないままだった
だから、私も良紀もＭになっていて、話しかけられてもはずかしくて返事ができなかった
廊下に良紀がいるのに気づいても私は教室からでることなく、むしろ教室の角で友達の後ろに隠れていた
こんなんじゃ付き合ってるって言えない

私はもっと積極的にならないといけないとおもった

話しかけられたら堂々としなきゃ
それから私はみんなの前でも堂々と彼と話せるようになった
始めの頃は話しかけられただけで顔が真っ赤になってしまっていたけど、それもだんだんなくなって付き合ってるってみんなの前でいえるくらいになれた
私の周りで付き合ってる人達も何人かいたけど、その中で私たちが１番らぶらぶといわれるようになった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4429i/

大丈夫だょ

2011年1月14日04時11分発行